

## 日蓮聖人の時間論

平 井 智 親

### はじめに

人は時間の中で生きており、時間と共に存在している。その意味で時間とは非常に重要なものといえるだろう。宗教においても時間は重要なものである。日蓮聖人もかなり時間というものを重視されていたと思われる。それは、御遺文の中で何度も時間について述べられていたり、独自の思想である五義判の一つであったり、『撰時抄』等の題号を考えれば理解できるであろう。

それ程関心の高かった日蓮聖人における時間の思想とはどのようなものであろうか。茂田井教亨氏は、日蓮聖人の時間に対する思想として「宗教的純粹時間」と「宗教的歴史時間」が認められると述べている(1)。「宗教的純粹時間」とは、「寿量品の積尊が内証体験したまえる絶対時であると共に我等行者の信体験に於て現成する絶

対時」であり、「宗教的歴史時間」とは、「捨身弘経の場に於ても体験され得る」時間である。この二つの時間が相即しており、それが日蓮聖人の時間に対する思想の特徴であると述べているのである。この論は後の研究にかなり影響を及ぼしているように思われる。というのは、これ以後の研究が、だいたい二元論的解釈をしているからである。本稿では、この茂田井教亨氏の論を中心として、前後の研究をみることにより、日蓮聖人の時間に対する思想がどのように解釈されてきたかを明らかにしたい。そしてそのことにより、問題点を指摘して、今後の研究の糸口としたい。

### 日蓮聖人の時間に対する思想研究史

日蓮聖人の時間に対する思想については、先師のいろいろな研究がある。しかしここでは、茂田井教亨氏以前

の研究として、守屋貫教氏のをとりあげておきたい。守屋貫教氏は、「日蓮聖人の時に対する観念」<sup>(3)</sup>と「再び日蓮聖人の時に対する認識」<sup>(4)</sup>という二つの論文において、日蓮聖人の時間に対する思想を考察している。「日蓮聖人の時に対する観念」において、時は教と関係して語られると述べて、『撰時抄』における時の観念は末法観にその特色があると述べている。その末法観とは、傍観ではなく、体験する実践的なものであるとしている。

「再び日蓮聖人の時に対する認識」では、時というものは機の具体的な姿であるとし、最悪の末法観と最善の教法の逆説的統一を体験的に認識したところに日蓮聖人の時に対する認識の特徴を認めている。

次には、茂田井教亨氏自身の論をもう少しみておきたい。茂田井教亨氏は、「日蓮聖人に於ける『時』の自覚」と「日蓮教学における『時』の問題」<sup>(2)</sup>の中で考察している。「日蓮聖人に於ける『時』の自覚」においては、『教機時国鈔』で初めて五義判が示され、時を一つの体系の中において認識していることを述べている。このよきな時の理解は立教開宗当初から日蓮聖人の心の中に存在したであろうが、正嘉元年の大地震によって經典に述べられていることが現実化して確実なものへとなったと

している。体系的に認識された時は、先述した「宗教的純粹時間」と「宗教的歴史時間」の二つの要素があり、このような時の自覚は『立正安国論』において誕生し、『撰時抄』において完成したと考えられると述べている。

「日蓮教学における『時』の問題」においては、日蓮聖人の歴史観は、事(現象)と心(理)が分離していない。『報恩抄』をみても、史実は事であるが、史観は事の心であるということの相違が理解できる。そして事によって心は表現され、心によって事が起きるという事と心の相即媒介の論理が、教の眞実性決定判断の基準となっていると述べている。五義判においても教を中心として五つの項がそれぞれ有機的に必然的關係をたもっているのであるが、その必然的關係こそが歴史的概念としての日蓮教学の本質なのである。また、歴史(教)・実存(行)・宗教(証)の視点から考察を試み、教については、宗教的創造の世界が常に絶対の現在ともいふべき時間否定的「今」において現成される時を教の時としている。宗教的創造の世界とは、聖教の心が現在の事において生きる世界である。行について、行が証を現成にするに至る時間的なものこそ実存的であり、証について、安住不動に求めず、動の中の不動に求めた。つまり、値難の中

に成仏という事実があると考え、そのような時間こそが証の時間であると述べている。

芹沢泰寛氏は、『観心本尊抄』における『時』について<sup>(5)</sup>という論文で日蓮聖人における時間に対する思想を考察している。心理的体験の立場から人の精神生活は来るべき事柄に対する希望と、過ぎ去った出来事に対する郷愁の両面をもっているが、この両者は人の主観的時間の両面をあらわすと指摘している。時の評価について象徴的表現の基本形態は時を好機と見るか、脅威と見るものである。多くの宗教においては、時間は人間にとって脅威であり、現代は末世であると説くと述べている。これ等を前提として、日蓮聖人の『観心本尊抄』執筆時の限界状況における体験時間の理解は、心理的主観的時間の面から近づきうるものである。しかし決してそれによってすべてを把握することができないものではなく、それは『法華経』にその真理性と客観性の根本をおくものだからであると論じている。

町田是正氏は、三つの論文において研究を発表している。最初は、『日蓮聖人の『時』の意識』<sup>(6)</sup>である。その中で、日蓮聖人の時代観・宗教理念は、末法為正という言葉で表現されているが、それは主体的行動にその本

旨があると述べている。次に、「日蓮聖人の時間論」<sup>(7)</sup>では、日蓮聖人の時間論の特色は、おかれている末法の認識、つまり客観的実在としての時の認識とともに、その客観的実在の時を主体的な時へと受容する意識にあると述べている。第三は、二つ目と同題の「日蓮聖人の時間論」<sup>(8)</sup>である。これにおいて、日蓮聖人は、「今本時」という『観心本尊抄』の言葉の中に久遠の今を思念し、末法為正の中に時を超える理念を樹立したと述べている。

北川前肇氏は、「日蓮教学における時間論の展開」<sup>(9)</sup>と題する研究の中で、日蓮聖人の時間概念は、思弁的哲理的な観念ではなく、『法華経』の説く釈尊の久遠の化道に根底を置くものである。教主釈尊による救済は、妙法五字の受持により、日常的時間と永遠なる時間の宗教的同時性が図られることにより完成すると述べている。

山本光明氏は、「日蓮聖人における『時』について」<sup>(10)</sup>と「日蓮聖人における『時』の問題」<sup>(11)</sup>という二つの研究を発表している。「日蓮聖人における『時』について」において、日蓮聖人の時間に対する思想を、現実という時間的制約を持つ歴史の中に被投的に投げ出された自己を、逆に企投的存在者として位置づけ、歴史を形

成していくという意味における企投的歴史時と、信仰と菩薩道の実践を媒介とした釈尊と感応道交せる信仰的実存時に分けている。そして、道元禪師と比較し、道元禪師の時間論は、思索的時間であり、日蓮聖人のは、実践の産物としての思索で、より実践的実存的時間であると述べている。「日蓮聖人における『時』の問題」においては、道元禪師・親鸞聖人と比較し、道元禪師は、思考の中心を現在におき肯定するが、個人的であり、親鸞聖人は社会的実践性はあるが現実視し社会的実践性をもつ歴史的時間の思想をそれぞれ特色としていと述べている。

#### むすびにかえて

日蓮聖人の時間に対する思想について、六氏の研究をみてきた。守屋貫教氏は、末法思想の中に日蓮聖人の時間に対する思想を考察し、その特徴として体験を通した二元相即論であると述べている。茂田井教亨氏は、その二元相即論を「宗教的純粹時間」・「宗教的歴史時間」という言葉を使って再定義し、またそのような思想の日蓮聖人における成立過程までも日蓮聖人の体験を通して論求したのである。一方、芹沢泰寛氏は、心理的な立場か

ら考察を進め、体験の重要性を再び強調した。町田是正氏は、末法思想を通して二元相即論を追認した。北川前肇氏は、救済の面から論を進め、『法華経』に日蓮聖人の時間に対する思想の根底があることを明らかにしている。山本光明氏は、二元相即論を前提として、同時代の宗教家である道元禪師や親鸞聖人と比較して、日蓮聖人の特色を認識している。

以上研究史を辿って理解できたことは、日蓮聖人の時間に対する思想の特徴は、釈尊の内証の世界たる特別な時間と我々凡夫の日常的時間の二つがまず認められるということである。そしてその二つが相即の関係にあるということ。また、相即関係は日蓮聖人自身の体験を通して形成されたことである。この三点をいろいろ視点や立場を異にして先師は論じられているように思われる。

ところで、北川前肇氏の指摘する通り、釈尊側の特別な時間の根底には『法華経』がある。特に寿量品が大きな位置を占めている。例えば、『一谷入道御書』で

娑婆世界は五百塵点劫より已来教主釈尊の御所領也  
(12)。

と述べられているが、これは、その特別な時間を表現されているのは勿論のこと、注意しなければならないの

は、「娑波世界」や「御所領」と空間的なものも表現されていっていることである。日蓮聖人の思想は、それぞれが有機的必然的關係をたもっていることは茂田井氏の指摘の通りである。しかし従来の研究はその視点が少し欠けていたように思われる。特に空間的視点は重要であろう。五義判の国も空間の範疇であるし、『法華経』の二処三会等空間の重要性は言うまでもない。そのような空間、そればかりではなく他のいろいろな思想との関係における時間に対する思想が今後は研究されるべきではないかと思われるのである。

註

- (1) 茂田井教亨稿「日蓮聖人における『時』の自覚」(『大崎学報』第百号所収) 昭和二八年
- (2) 『大崎学報』第一三〇号所収昭和五二年
- (3) 『法華』二五卷第一号所収昭和十三年
- (4) 『法華』二五卷第三号所収昭和十三年
- (5) 『桂林学叢』第七号所収昭和四八年
- (6) 『棲神』第四九号所収昭和五二年
- (7) 『棲神』第五二号所収昭和五五年
- (8) 『棲神』第五四号所収昭和五七年
- (9) 渡辺宝陽編『法華仏教の仏陀論と衆生論』所収昭和六十年

- (10) 『日蓮教学研究研究所紀要』第四号所収昭和五二年
- (11) 『日蓮教学研究研究所紀要』第五号所収昭和五三年
- (12) 『昭和定本 日蓮聖人遺文』九九二頁